



Title	ガンディー主義におけるカーディーの継承：手紡ぎと手織りの意味をめぐって
Author(s)	岡田, 弥生
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ガンディー主義におけるカーディーの継承:手紡ぎと手織りの意味をめぐって

岡田 弥生 大阪大学大学院在学

はじめに

カーディーとは、インドをはじめとする南アジアにおいて、手紡ぎ手織りの布を指す語である。もともと、布全般を意味する語にすぎなかったが、M.K. ガンディー（1869-1948）が政治運動でもちいたことで、自由や自治、独立を象徴するようになった。カーディーはおおむね、平織りで、素材には主に綿が使用される。色はさまざまであり、手紡ぎ独自の凹凸があることが特徴である。現代においても、カーディーはインド国内外で受容されている。本発表では、いかにカーディーが現代に継承され、ガンディー思想がインド固有の染織文化に影響を与えているのか、その一端を現地での調査に基づいて明らかにしようとした。

これまでのカーディーに関する論考は、植民地期のインドにおける受容が議論の中心であり、現代の姿は未だ断片的にしか捉えられていない。また、カーディーの政治的機能に関しては豊富に扱われてきたが、美しさやデザインについては未だ十分に検討されていない。しかし、現代と問題意識を共有するガンディーが一枚の布に付与した道徳性は今後、持続可能な布の生産やデザインのあり方を検討するうえで示唆的であると考え、カーディーを分析の対象とする。

カーディーの変遷

ガンディーの登場以前、インド国内では、産業革命と植民地制度により打撃をうけた自国産業の復興のため、英国製品のボイコットと国産品の使用をすすめるスワデシ運動が民族主義者を中心に

ひろまっていた。そのような中で、1915 年に南アフリカから帰国したガンディーはスワデシ運動を国産の手紡ぎ手織り布の生産と使用を推奨するカーディー運動へと発展させる。古典的な手紡ぎ手織り布が彼の心を捉えたのは、それが彼の真理や非暴力といった理念とともに、反近代の精神を的確に体現したためである。ガンディーはカーディーをインドの独立へと導く手段に据え、その普及に尽力した。

現代に受け継がれるカーディーは主に、三つの潮流がみとめられる。第一に、ガンディー主義者が継承するカーディー、第二に、ナショナルブランドとして政府が推進するカーディー、第三に、ファッションデザイナーがもちいるカーディーである。本発表はそのなかでも、第一の点すなわち、今日のガンディー主義者がいかにカーディーの思想と実践を重視しているか、に注目した。

ガンディーの思想を継ぐ教育機関

ガンディーの思想に共感する人々がどのようにカーディーを現代に受け継いでいるかを探るため、発表者は 2022 年 11 月から 2ヶ月半のあいだ、グジャラート・ヴィダヤピット（Gujarat Vidyapith）という教育機関において、調査を行った。

グジャラート・ヴィダヤピットはイギリス政府が敷く教育体制を放棄し、インド人によるインド人のための教育を行うため、1920 年にガンディーが創設した教育機関である。現在は、ガンディーの思想に根ざした教育を行う。その教育活動のなかで、学生と教職員は、糸紡ぎへの従事やカー

ディーの着用が義務付けられている。

ヴィダヤピットの糸紡ぎ

ヴィダヤピットにおける糸紡ぎは、二つの時間で行われる。

一つ目は、糸紡ぎの授業である。すべての学生は毎日糸紡ぎの授業が時間割に組み込まれている。このとき使用される道具は、アンバー・チャルカと呼ばれる糸車である。同時に複数のボビンに糸を巻き取るため、効率的に紡ぐことができる。学生がアンバー・チャルカで紡いだ糸からは、学内の手織職人によってカーディーが織られる。このカーディーは、少しざらつくがほぼ均等な厚さとなる。現在ところ学外への販売は行われていない。

二つ目は、昼の礼拝の時間に学生と教職員が行う糸紡ぎである。その際、使用される道具は、イエルワダ・チャルカという糸車である。イエルワダ・チャルカは木製で、畳んで持ち運び可能であることが特徴である。紡いだ糸は、工芸の授業でマットの制作のために使用されていた。糸が太く凹凸があるため、このカーディーには厚みがある。

ふたつの糸紡ぎを比較してみると、アンバー・チャルカは生産性を重視し、自治の精神を現代に継承するものである一方で、イエルワダ・チャルカは礼拝のなかで使用され、信仰を継承するものだと考えられる。これらふたつのヴィダヤピットの糸紡ぎは、ガンディーの実践を受け継ごうとしているものの、国の独立を目指したガンディー時代のそれとは、目的が異なる。現代において布を作る過程を学生が数年間に渡って経験することは、尊厳のある労働や持続可能なものづくりについて理解を促す「きっかけ」となりえる。

ヴィダヤピットの制服

ヴィダヤピットでは、カーディーが学生の制服に指定されている。生地とおおまかなデザインは指定されているものの、端の始末や袖の形など細かな部分には規則がない。

現代においてカーディーを着用することがどのような意味をもつのか、より深く理解するために教員、職員、学生の3名に簡単なインタビューを行い、そこで得た答えを参考にしながら、カーディーの制服の役割を考察した。インタビューをもとにすると、カーディーは現在でも政治的立場を表明する機能を担っていることが改めて確認できた。しかし、ガンディー主義者とは異なる立場をとるモディ首相もカーディーを着用する。カーディーの着用はたしかに政治的な立場を主張するが、誰を、何を支持するか、についてはカーディーを着ているだけでは、判断できず、かえって信条を覆い隠すことがある。また、カーディは着用者のふるまいを規定する作用がある。カーディーの制服の場合は校則をただまもるためでなく、ガンディー主義にふさわしい行動をとるよう求められることがわかった。

結論

本発表は、グジャラート・ヴィダヤピットにおける糸紡ぎと制服の事例を分析し、現代のガンディー主義者たちが受容するカーディーの姿を捉えようと試みた。その結果、「自治」や「祈り」といった従来の役割とともに、社会に変化をもたらす「きっかけ」となる新たな糸紡ぎの機能を明らかにした。また、カーディーの着用がある政治的立場を必ずしも主張できない一方で、ガンディー主義者たちはその着用によって行動を規定されている可能性を指摘した。独立から70年以上が経過した現代でも、糸紡ぎやカーディーはガンディー主義の思想とともに受け継がれているが、ガンディー当時と現代とでは社会が大きく変化したため、ヴィダヤピットでは時代にふさわしいカーディーの意味や機能を模索中であるといえる。しかし、ガンディーの思想が今日でもインド固有のテキスタイルに関する意識や習慣の形成に影響を与えて続けていることは確かである。